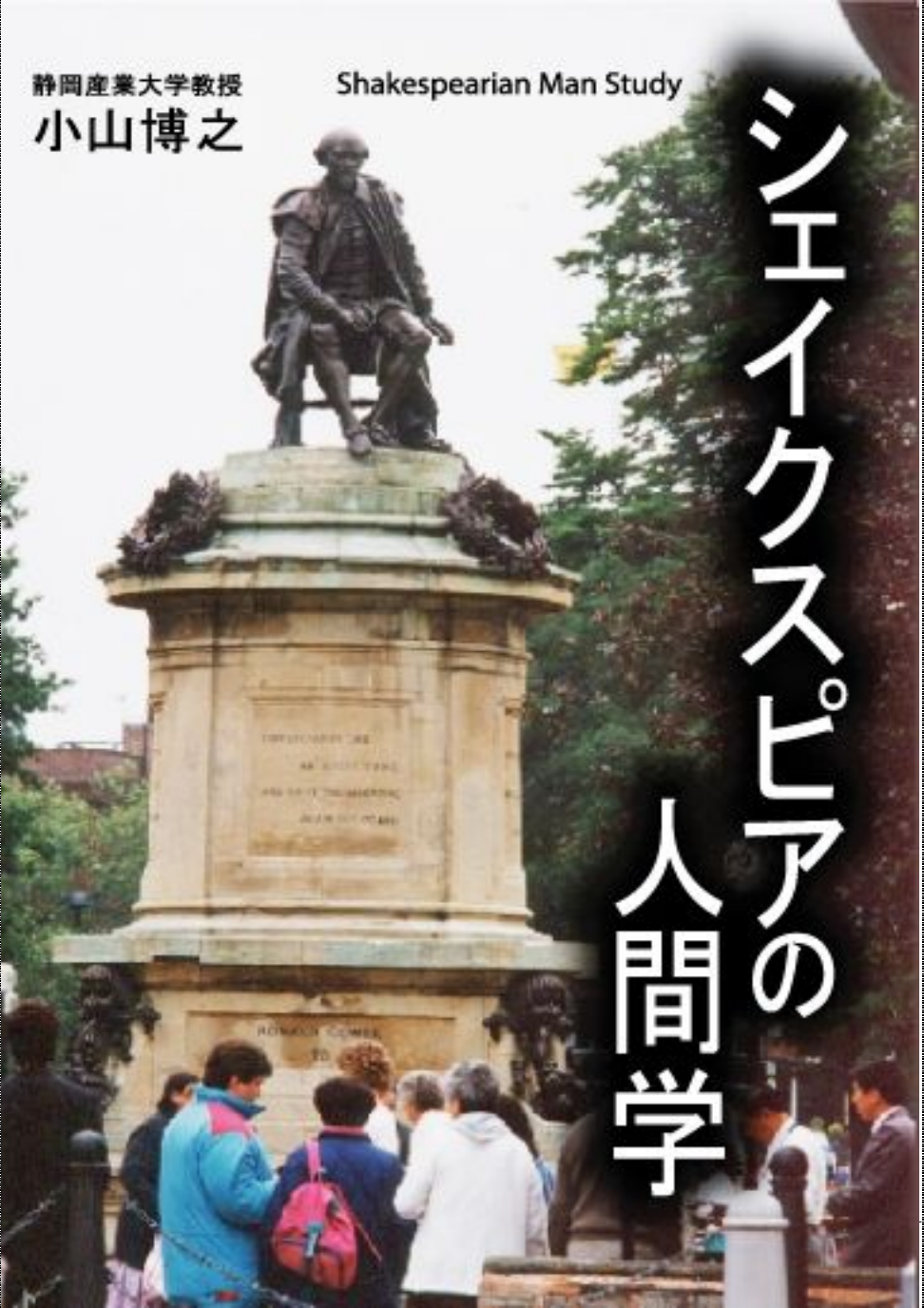


シェイクスピアの 人間学

Shakespearian Man Study

静岡産業大学教授
小山博之



第1章 権力者を蝕む権力欲

シェイクスピアの最高傑作にあげる人の多い、「リア王」は権力の虚しさと世界の崩壊を描いたスケールの大きな作品である。その中に経営者や権力の座にある人が聞いたらドキッとする言葉がある。

犬でも職権を与えられれば

人はこれに随へしたがゞう

時代と環境を越えた永遠の真理であろう。部下が頭を下げるのは、その人の持っている職権に対してであって、たまたまそのポストにいる個人にはない。そのところが分かっているようでいて、人にはうぬぼれがあるから、つい混同してしまう。

かつて米国のビジネス・ウィーク誌が「CEO（最高経営責任者）病の兆候」と題して権力欲を分析したことがある。それによると典型的な兆候は次のような

ものである。

- (1) 自分はミスを犯すはずがないと思ひ込み間違いを認めない
- (2) 会社ではなく個人の利益のためマスコミの注目を浴びたがる
- (3) 何事も全て自分で決めたがるが、細かいことは調べようともしない
- (4) 会議で座る場所や、自分が部屋に入ってきたとき皆が起立したかどうかを
気にする

- (5) 収入、役得など他社のCEOに比べて上でないと気がすまない
- (6) イエスマンばかりをはべらす
- (7) 社外活動にばかり時間を割き、政治家気取りの言動をする
- (8) ポストにしがみつき、後継者候補をつぶそうとする

さて、胸に手を当てて考えてみて、いくつか思い当たるようなら御用心。しか

し、本当のところは自分では分からないものだ。たとえば、(6)。はたから見たら、イエスマンばかりで固めていても、当の本人にそうした意識があることはまずない。だから、権力欲は始末が悪い。

さすが炯眼《けいがん》、シェイクスピアは、「ジュリアス・シーザー」でそのところをこう言い当てている。

目がおのれを見うるのは
ただ反射によってだけだ
何かほかのものがなければ
みえるはずがない

なかなかの名言である。あらゆるものを見る目といえども、自分自身を見ることはできない。俺は人を見る目があるなどといっていても、自分のこととなると、

からきしダメである。

これは素晴らしい経営者だと思っていた人が、自分の息子のこととなると、とたんに目が曇って、真実が見えなくなるということがよくある。息子は自分の分身だから、自分同様、自らの目では見えないのだ。

むろん、名経営者で権力欲の極めて少ない人もいる。

九五年六月に会社を辞め、相談役にもならず会社から一切身を退いたヤマト運輸の前会長小倉昌男氏などもその一人だろう。小倉氏は七一年に社長となり、八七年に会長となったあと、九一年にいったん取締役相談役に就任した。

しかし、九三年に「社内に蔓延している大企業病を退治するため」会長に復帰した。それから二年。ほぼ目的を達成したとして、自ら会社との縁を切ってしまった。自分がどんな形であれ、会社にとどまれば、皆が頼って、企業にとってマインナスになると判断したという。

ヤマト運輸における小倉氏の存在の大きさを考えれば、もう一度取締役相談役

としてとどまってもおかしくはない。だが、小倉氏は、存在の大きさが逆に禍根を残しかねないと考えた。小倉氏はまだ七十歳。完全に引退する歳でもない。それなのに、この決断は見事である。

「年の功でごまかしてきたが、頭の油も切れてきた。以前は分かった細かいことが、最近は分からなくなった」との自己分析も誰でもできることではない。先述したビジネス・ウィーク誌CEO病の兆候で真っ先にあげられた「ミスを犯すはずがないと思いつむ」のとは正反対の態度といっている。

公私混同も権力の座にいるものが陥りがちなことだ。特に創業経営者の場合、会社は自分のものとの意識が強い。しかし、公開したからには、会社はもはや個人のもではない。

三井ハイテックの創業者で会長兼社長の三井孝昭氏は、個人で使ったものの伝票には必ずアカペンで「個人払い」と書くことにしているという。トップの場合、社用なのか個人用なのかはっきりしないグレーゾーンがあるが、そんな時には、

自分に厳しくする節度が欲しい。

社員はちゃんと見ているのだ。どんな偉そうなことをいっても、公私混同して
いると思われたら、とたんに信用をなくす。家族で飲み食いしたついでに会社
に回す不届きな経営者もいないわけではあるまい。そんな例を見聞きするとあさま
しいというか、哀れになる。社員が会社に愛想を尽かすのはこんな時なのだ。
権力をもっているものがまず心がけなければならないのは謙虚になることであ
る。

法と倫理を扱い近年、脚光を浴びている作品に「尺には尺を」がある。そこで
シェイクスピアはこう書いている。やや長いが噛みしめてみる価値のある言葉だ。

ところが人間は

傲慢な人間は

束の間の権威をかさに着る

人間のおろかな姿を見ては

天使も抱腹絶倒するという

人間の茶番劇を見つめるシェイクスピアの目は透徹している。

自分を見るもう一つの目を心のうちに持つのが権力の亡者にならないための
秘訣だろう。社外の友人の声を聞くなどして、「天使の眼差し」を持つようぜひ
心がけて欲しい。

権力欲は鼻持ちならないが、事業欲は旺盛でなくては経営者の資格はない。

セコムの飯田亮と話していたら「創業経営者は死ぬまで会社のことが頭から離
れないでしょうね」と自分の将来を見通すような調子で言っていたのを思い出す。
むろん、会社のことが頭から離れないのと、権力の座にいつまでも居座るのとは
違う。

飯田氏はこの二つをはっきりと区別して考えているが、人によっては混同して

しまう人もいる。そこが事業家と単なる権力の亡者との分かれ目である。

YKKの創業経営者である故吉田忠雄氏は晩年までこういつていた。「私は永遠の十八歳。未完成だからいつも完成の夢を見ているんです」。そしてこうもいつていた。「皆さんは夜、夢を見るが、私は夢は昼間見るんですよ」と。事業欲は死ぬまで衰えなかったが、権力志向はあまりない人だった。

創業経営者と比べるのは酷だが、創業経営者でない経営者も事業欲は盛んなほどいい。事業をどうするかという事をいつも考えていけば、権力に恋々としている暇などないはずである。

権力志向が高まるのは事業欲が衰えた証拠だろう。もつとも、この権力志向というのは人によってかなり違う。ある社長は、後継者を選ぶ基準の一つに「いばらない、私欲がない」というのをあげていた。かりに仕事は優秀でも、えらぶる性癖の男は部下がついてこないから、結局、経営者としては失格ということになる。

最後に「アントニーとクレオパトラ」で侍女がクレオパトラに言う言葉を紹介しよう。

魂が体を離れる時の苦しみも

覇者とその権力を失う時のそれに比べれば

まだしもと申します

人間は弱いから、いつも心していないと知らず知らずのうちに、権力欲に取りつかれていたなどということになりかねない。

偉くなると、だれしもお世辞攻めにあう。世辞と分かっているつもりでも、人間は弱いから、つついその気になってしまう。

世辞をいう方は自分が可愛いから、相手に尻尾を振ってみせているだけのことだ。

ふんぞりかえっている

馬鹿どもをなめる役割は

砂糖で甘やかされた舌に

任せておけばいい

(ハムレット)